発達理論の学び舎

Back Number: Vol 47

Website:「<u>発達理論の学び舎</u>」



目次

- 921.【ザルツブルグ訪問記】終わりと始まりの間にある自己回帰
- 922. 【ザルツブルグ訪問記】モーツァルトが与えてくれた炎と光
- 923. 【ザルツブルグ訪問記】モーツァルトの能力発達要因
- 924. 【ザルツブルグ訪問記】偉大な創造者たちから受け継いだこと
- 925. 【ザルツブルグ訪問記】小さな町オーベンドルフから
- 926. 【ザルツブルグ訪問記】今が永遠に、永遠が今に変わるとき
- 927.【ザルツブルグ訪問記】開かれた眼を通じて生きること
- 928. つぼみから花へ: 早朝の静かな誓い
- 929. 旅を終えてのこれから
- 930. 場所だけに宿る精神
- 931. 知識体系の発達と差異
- 932. 旅の経験から教えられた重要なこと
- 933. 創造性の四つの段階
- 934. 横山大観の名作『趁無窮』より
- 935. 内側のさざ波と静かな音
- 936. 肯定·承認·共感
- 937. 顕現を待つ内側の音楽
- 938.「創造性と組織のイノベーション」の試験を終えて
- 939. 一年間に読んだ論文の量について
- 940. 英語·音楽·R

921.【ザルツブルグ訪問記】終わりと始まりの間にある自己回帰

――旅愁とか旅情とか全て旅をしている感じを指すものは、こうしてある場所に自分を見出すことから 発している――吉田健一

三日間にわたる非線形ダイナミクスに関する学会が終了した。主催者から学会を締め括る言葉が述べられた後、私は隣に座っていたオランダ人のヘレーナに挨拶をするとすぐに会場を後にした。会場を後にし、とりあえず宿泊先のホテルで少しばかり一人の時間を設けようと思っていた。一人になりながら、あれこれと今回の学会について振り返りを行っていた。だが、なぜだが自分の言葉が思うように出てこなかった。そうした状態が就寝まで続き、一夜が明けた。

晴れ渡るザルツブルグの早朝と同様に、自分の心も確かに清々しさのようなものがある。しかし同時に、何とも言い難い名残惜しさのようなものが胸に飛び込んできた。今朝の私は間違いなく、学会で出会った素晴らしい研究仲間たちとの別れを惜しみ、ザルツブルグでの滞在も今日が最後であることを惜しんでいるようであった。私はこうした名残惜しさと正面から向き合わなければならない。

これまで何度となくこの感情を見て見ぬ振りをしながらやり過ごしてきた。昨日の学会終了後の行動は、これまでの人生で何かが形式上終わるときに取ってきた自分の行動と何ら変わるものではなかった。昨日の学会が終了した時の感情は、学校の卒業式が終わった感覚に近かった。卒業式に参加しなかったものも幾つかあるが、参加した卒業式ですら、式が終わると、私は友人やお世話になった方に挨拶をすることを最小限にとどめ、一人になれる場所に向かう傾向が強くあった。私が昨日に取った行動はまさにそれと同じであった。宿泊先のホテルの自室で少しばかりこの件について考えていた。

考えようと思って考えたのでは決してない。思考と感情がこの対象に自発的に向かうのだ。私の内側で、それが外側に形として表出したがっていることに気づいた。その衝動に従うと、その正体は旅情の最終地点であった。

何かが終わることに伴う始まりを告げる感情、そして、何かが始まることに伴う自己回帰の感情。自 分の内側で何かが終わり、何かが始まり、再び自己に戻ってきた時に感じるものが、今私がこの瞬間にまさに感じている感情にほかならない。これは、昨年の夏の欧州小旅行の際に日記に書き留 めていた「旅の侘び寂び」とほとんど同じものだと思うのだ。だが、あの時には、旅が終わりを告げる ことが自己に回帰するということの意味を掴んでいなかったように思う。

あの時に感じていたのは、何かが終わることに伴う新たな始まりであり、終わりと始まりの間隙に存在する侘び寂びであった。それは喜びのような感情とは全く別種である。喜びのような明るい色を発することなく、同時にそれは暗い色を発するわけでもない。それは無色という色を持つ感情であり、色を持たない色が内側を照らしていた。

無色であるがゆえに、新たな始まりと共にいかなる色にもなり得ることができるというのは確かだろう。しかし、色を求めてはならない。なぜなら、自己の本質は、無色透明の中にある固有の色だからである。ここが鍵となる。

何かが終わり、新たなものが始まりを告げる時、私たちは自己に回帰する。自己回帰の際に、自己の固有の色が開示される無色透明の色の世界が顕現するのだ。そこに自分の作為で色を付け加えようとしてはならないのだ。無色透明の色の世界の奥に、すでに自分固有の色がある。それを見出さなければならない。

三日間の学会が終わり、オーストリアの旅が終わりに近づく今日という日に、旅の侘び寂びをもたらす感情と静かに向き合うことができて幸運であった。どうしてこれほどまでに自己を見出すことが困難なのかを思わずにはいられない。それは自己があまりにも私たちの近くに存在しているからであり、片時も私たちから離れたことはないからである。自己を見出す契機は、何かが終わり、新たなものが始まるその瞬間にあるのだと思う。そしてその瞬間は、常に今目の前に生じている、この連続する今という持続の中にあるのだ。2017/4/9

922. 【ザルツブルグ訪問記】モーツァルトが与えてくれた炎と光

昨日に学会を終えたため、今日は一日中観光に時間を充てることができた。昨夜は少しばかり自分の考えをまとめる必要があり、一時間ほど通常よりも就寝時間が遅れてしまった。そのためか、起床時間も一時間ほど後ろにずれ込んだ。起床直後、学会が終わったことに伴う何とも言えない気持ちに浸されていたことは、すでに日記に書き留めていたように思う。

早朝に日記を一つほど書き留めてから、ホテルの自室で簡単に朝食を済ませ、ザルツブルグの街に出かけて行った。今日が実質上、ザルツブルグの街を歩くのは最後だという気持ちがありながらも、爽快な春の陽気がそうしたことを忘れさせてくれた。今日のザルツブルグの天気は本当に素晴らしかった。早朝の観光に関して、真っ先に向かったのはモーツァルトの生家である。

ここはザルツブルグの街の中心にあり、ザルツァハ川の左岸に位置している。現在は、モーツァルトの生家は博物館として開放されており、今の季節は朝の九時から入館ができる。入館時間とほぼ同時に博物館に到着した私は、すぐに中に入ることをせず、しばらくモーツァルトの生家の外観を眺めていた。ここでモーツァルトが誕生したのだ、ということを少しばかり噛み締めておきたかったのだ。

周りの環境を含め、モーツァルトがこの場所で生まれたことを再度確認してから、私は博物館の中に足を踏み入れた。チケット売り場で、この博物館の近くにモーツァルトが長らく住んでいた場所があり、そこも博物館になっているということを聞いた。そのため、私は二つの博物館に入館できる一枚のチケットを購入した。入館に合わせて到着したため、最初の一時間は人がほとんどおらず、モーツァルトの生家を貸し切るような贅沢な形で展示物を閲覧することができた。

これはウィーンで訪れたモーツァルト記念館で認識を改めたことなのだが、モーツァルトという音楽家は確かに天才的でありながらも、「天才」という言葉で単純に片付けることができないほどに、音楽と向き合う人間だったのだと思わされた。つまり、モーツァルトは天賦の才によって音楽を創造していながらも、天賦の才をさらに成熟させていくための、音楽に対する投入量が尋常ではなかったことがわかる。無数の演奏を欧州各地で幼少から積み重ね、600以上の楽曲を生涯にわたって作り出すという実践があったがゆえに、モーツァルトは自身をモーツァルトたらしめたのではないかと思うのだ。

端的に述べると、モーツァルトは音楽を受動的に受け取る人間ではなく、音楽を積極的に生み出す人間だったのだ。モーツァルは音楽を決して傍観的に捉えることはなく、絶えず音楽の中で生き、内側で鳴り渡る音楽を絶えず外側に表現しなければ気が済まなかった人物だったのではないか、ということに資料を眺めながら改めて気づいた。

これはどのような分野においても当てはまることだろう。特定の領域を深めていく際に不可欠なことは、内側にあるものを外側に形として表現し続けることなのだ。正直なところ、それ以外に方法はない。いかなる領域の偉大な人物も、絶えず表現する人間だったのだ。

それらの人間は、絶えず絶えず生み出し続ける行為に従事することを宿命付けられていたとも言える。モーツァルトから再度教えられたことは、内側のものを絶えず外側に表出し続けることの重要性だった。

博物館のある部屋から別の部屋に移動する時、私は、モーツァルトが短い生涯の中で残した楽曲の数を再度数えていた。その数を数え終えた時、創造活動に対する私の意志が静かに燃え上がるのを感じた。それはこれまで私が内側に保持していた炎とは異質のものであり、間違いなくモーツァルトという偉大な作曲家が私に与えてくれた創造に関する炎だった。数日前、私が日記の中で、自己の根幹部分に関してもはや迷うことはないだろう、という予感を持っていたのは、まさに今日のこの一件と関係していたのだ。

モーツァルトによってもたらされた内側の炎は、必ずや内側を照らし出す光となり、もはや私の自己は迷うことなく、行くべきところに行き着くまで歩き続けるだろう。果てのない終着点に向かって歩き続けることができるという確信を得たのは、この内側の炎と光のおかげだった。内側の炎と光を通じて生き、内側の炎と光の中で死ぬことができること以上に私が望むことはない。2017/4/9

923. 【ザルツブルグ訪問記】モーツァルトの能力発達要因

いよいよザルツブルグを出発し、オランダに戻る朝を迎えた。起床直後、今回の旅がもたらした侘び寂びが私の中に依然としてとどまり続けていることに気づいた。今回の旅を簡潔に総括することができないぐらい、旅が本質的に持つ自己回帰作用が複雑に自分の内側でうごめいている。この複雑に絡み合った糸を少しずつ紐解いていくとき、今回の旅が私にもたらした本当の意味がわかるだろう。

今はその意味を無理に掴み取ろうとする必要はない。私にできることは、今回の旅が私にもたらし た本質的な意味の外側にある意味を探索し、それらを見出す過程を通じて、内側の本質に近づい ていくことだろう。本質的な意味は、それを包み込む外側の意味をつぶさに見出そうとする者だけ に開示されるのだ。

今回の旅がもたらした本質的な意味の外側を歩くように思考を巡らせていると、昨日訪れたモーツァルト博物館の展示資料を通じて、モーツァルトが幼少期の頃から音楽旅行と称して、欧州各地を旅していたことが妙に印象に残っている。モーツァルトは、生涯の三分の一を旅に費やしたそうだ。記憶が正しければ、モーツァルトは六歳の頃にミュンヘンへ演奏旅行に出かけたことを皮切りに、それ以降、欧州各地を旅しながら自身の音楽を深めていった。

単なる観光ではなく、文化の異なる様々な場所で自身の音楽を披露し、演奏を通じて自分の音楽をより研ぎ澄ませていった様子が見て取れた。モーツァルトの才能が真に開花した要因は多数考えられるが、一つには文化的に異なる多様な人物との交流を通じた演奏旅行にあったことは間違い無いだろう。他者との交流に関して、見逃すことができないのは、モーツァルトは優れた人的ネットワークの中でその音楽的能力を高度に鍛錬していったことだ。

モーツァルトの才能をいち早く見抜いた音楽家でもあった父レオポルトの存在は、モーツァルトにとって非常に大きなものであったことが資料から読み取れた。父レオポルトは、モーツァルトに音楽教育を施しただけではなく、語学を含めた一般教養教育をも施し、モーツァルトは学校に一度も行くことなく、広範な語学と教養を身につけることができた。また、交響曲の父と称されるヨーゼフ・ハイドンもモーツァルトの才能にいち早く気づき、二人の年齢差は親子ほどのものがあったが、生涯にわたってお互いに学びを深めていったことがわかった。

その他にも、モーツァルトを取り巻く人的ネットワークには、音楽的な才能に恵まれた姉のナンネルの存在や、音楽に造詣の深かったマリア・テレジアを含めた各国の王侯貴族の存在を忘れてはらないだろう。そうした多様なネットワークの中で、モーツァルトの才能が育まれていったのだとつくづく思う。音楽の領域で傑出した人物や演奏の場を提供してくれる人物たちとの交流と、文化的に異なる多様な場所に出向き、演奏という実践を絶えず行い続けたことが、モーツァルトの音楽的能力を真に高めていったのだと思わされた。

モーツァルトの才能の発達過程を眺めていると、それは天賦の才能だけによるものではなく、取り巻く人々や環境の影響が非常に大きかったことが改めてわかる。内在的な才能と外在的な環境をもとに、モーツァルトは絶えず音楽を演奏し、絶えず楽曲を作るという膨大な量の実践を通じて、その才能を卓越の境地にまで高めていった。

ウィーンとザルツブルグでモーツァルトに関連する資料を四冊ほど購入したため、今後もモーツァルトの能力発達要因とその過程について密やかに探究を継続させたいと思う。2017/4/10

924. 【ザルツブルグ訪問記】偉大な創造者たちから受け継いだこと

今、ザルツブルグからウィーン国際空港に向かう列車の中でこの日記を書いている。列車の中で先ほどまで、「創造性と組織のイノベーション」のコースの最終試験に向けた課題論文のいくつかをもう一度読み返していた。

今回のオーストリアの旅の形式上の目的は、非線形ダイナミクスに関する学会に参加することであった。しかし、よくよく考えてみると、今回の旅の背後には、人間が発揮する創造性について考えを深める豊富な機会が散りばめられていたように思う。そうした機会は、ウィーンとザルツブルグで訪れた数多くの博物館や美術館によってもたらされたものである。特に、偉大な音楽家の記念館や博物館に足を運び、実際に自分の肉眼と心眼で彼らの創造性の根源とそれを育んだものを捉えることができたことは、私にとって非常に大きなことであった。

それらの体験は間違いなく、創造性に対するこれまでの私の考え方をより深めてくれたと言える。やはり、私は内側の思念や感覚を外側に形として表現することを絶えず行っていかなければならない。 それもこれまでとは次元の異なる量を持ってしてそれを行いたいのだ。

今朝方、宿泊先のホテルからザルツブルグの中央駅に向かう最中、ある横断歩道で信号待ちのため一時停止した。大通りを走る無数の車の騒音が耳に入らないほど、自分の内側の世界の中で私は考え事をしていた。それは、この世界に何かを創造することについてであった。

「内側の世界の現象を絶えず外側の世界に形として表現し続けなければならない」という巨大な思いが私を包んでいた。重要なことは、内側のものを外側に表現することが「ねばならない」ということ

であって、それは義務感ではなく、義務感を超越し、内発的な動機すらも超越するものであるということだった。

私は決して、内側のものを外側の世界に表現「したい」のではない。そうした思いに基づいて何かを表現することは、もはや過去のものとなった。義務感を超越し、内発動機すらも超越した形で絶えず内側のものを外側に表現し続けることが何よりも重要なのだ。

横断歩道が赤信号から青信号に変わった時、創造性を司る私の内側のエネルギーは、もはや何 者も止めることができないぐらいに外側に流出しようとする動きを見せていた。

今回の旅を通じて出会った偉大な創造者たちは、「義務感に基づいて創造的な活動に従事することほど馬鹿げたことはなく、単純な内発動機だけに基づいて創造的な活動に従事することほど陳腐なことはない」と私に訴えかけてきた。彼ら偉大な創造者は、「何かを創造しなければならない」「何かを創造したい」という思いすらも超越する形で日々の創造活動に営んでいたのだ。

ウィーンへ向から列車の車窓から、のどかな田園風景が見える。目に映る植物や生き物たちが意志を超えて生まれ出てきたように、内側のものを意志を超えて外側に形として生み出し続けていかなければならない。この思いに至らしめるために、それらの偉大な創造者たちはウィーンとザルツブルグに私を運ばせたのだ。彼らの意志と創造エネルギーをごくわずかでも伝承した者として、私は絶えず創造活動に営む決意を新たにした。2017/4/10

【追記】

この日記では明示的に述べられていないが、この体験が私を作曲実践へと導いた。実際に作曲を開始したのがいつだったのかについては、これからまた過去の日記を読み返してみることによって明らかになると思う。フローニンゲン:2018/5/5(土)10:53

925. 【ザルツブルグ訪問記】小さな町オーベンドルフから

――小さいことは美しい――レオポルド・コール

ザルツブルグから列車に揺られ、無事にウィーン国際空港に到着した。搭乗までに時間があったので、セキュリティーを通過した後にカフェに立ち寄り、少しばかり日記を書き留めておきたいと思う。 今この瞬間に書き留めておきたいことは、昨日訪れたオーベンドルフというオーストリアの小さな町についてである。この町について知っているだろうか。

この町は、『きよしこの夜』が誕生したことでも有名な場所である。人口が6000人ほどの町に私は引き寄せられるように足を運んだ。この町は、以前私の父が訪れたことのある場所でもあり、その時の旅の話をこれまで何度か聞いていた。その話を最初に聞いたのは、おそらく私が高校生の頃だったと思う。

父から初めてオーベンドルフの町について話を聞いた時、その場所に訪れたいという特別な思いが湧くことはなかった。だが、昨年の年末に父と話をした時に、偶然にもこの町の話が出てきた。それ以降、私の頭の片隅にこの町の存在があった。これも何かの縁なのだろう、日本への一時帰国を終えてオランダに戻ってからしばらく経つと、私はザルツブルグで開催される学会に参加することになった。

ザルツブルグに参加することを決定して以降もしばらくの間は、オーベンドルフという町の存在が私の顕在意識に上ることはなかった。だが、ザルツブルグに向けての出発が近づき、近郊の土地を含めてあれこれと調べていると、偶然にもこの町の存在に気づいたのである。

学会に参加していたオーストリア人に話を聞くと、オーベンドルフという町について知っている人は ほとんどおらず、『きよしこの夜』の存在すら知らない人も多いことには驚かされた。しかし、それでも 私は何かこの町に不思議な縁を感じていたため、ザルツブルグ滞在の最終日の午後に、この町に 向けて出発した。

ザルツブルグの駅からオーベンドルフまでは電車で20分ほどなのだが、その電車が2時間に一本しかない。私はとてもローカルな列車に乗り込み、ザルツブルグから北上し、オーベンドルフに向かった。赤い色をした二両編成の小さな列車に乗りながら、開いた窓から吹き込む爽やかな風を全身に浴び、私は目に映る景色をぼんやりと眺めていた。すると、私は時間の流れない時間感覚の中にいた。

ここは時間を超越した世界であり、自分の内側の真実の声を聞くことのできる世界である。そこで私は、『「その」ために「この」ように生きる必要がある』という自分の内側で静かに鳴り響く真実の声を聞いた。世間一般で信じられている生きる目的や生き方を信じてはらない。そして、それらに従って自分の日々を刻んではならない、という光を伴った重厚な声を聞いたのだ。

私は、この世界で生きるほとんど全ての人たちがこの声を聞くことなく、他者や社会が作り上げた偽りの声に従って生きていることを知っている。また、私自身も、固有な自己の核から発せられる真実の声に常に従って生きることが難しいことも知っている。だが、私たちは聞き取らなければならない。私たち一人一人にだけ聞こえる真実の声を。

本当の幸福は、その声の中にある。そのようなことを思いながら、私はオーベンドルフに向かう小さな列車の中にいた。

オーベンドルフの駅に到着すると、あまりにも小さな駅であることに驚いた。改札もなく、一応駅員が滞在する小さな建物があるだけの駅だった。列車から降りた時、目の前に広がる景色の美しさに思わず息を飲んだ。新緑に溢れたなだらかな山々が私の目に飛び込んできた。

駅から『きよしこの夜』が誕生した礼拝堂までは、歩いて20分ほどかかる。私は高台にある駅から町の中心部に向かうために下って行った。道中、鳥の鳴き声が小さくこだまする。現代的な街では享受できない豊かさがこの町にはあった。それは私が最も大切にしているものであり、その豊かさの中で生きたいと常に思っている。

自然に溢れる道を歩くだけで、芸術がもたらすような感動がそこにあった。自然とは芸術であり、芸術とは自然なのだということがわかった。そして、自然と芸術の中には、私たちを感動に誘う扉が常に開かれていることにも気づいた。開かれた扉の先に行くかどうかを決めるのは私たちだ。

私たちの感覚が淀んでさえいなければ、そして、内側の真実の声に従って歩いていれば、必ずこの扉の向こう側の世界に入ることができる。そのようなことを思わずにはいられなかった。

しばらく歩いていると、礼拝堂に行くために渡らなければならない川が見えてきた。そうなのだ。私が歩いてきた道というのは、ドイツの領土であり、川を渡った先はオーストリアの領土なのだ。私はこ

の川を眺めながら、文字通りドイツの国境沿いを歩いていた。川の水はとても澄んでおり、川原で休んでいる人たちの姿がちらほら見えた。

今日の気温はとても暖かく、長らく歩いていると汗ばんでくるほどであった。山々に囲まれ、綺麗な川を眺めながら歩いていると、目的地の礼拝堂に到着した。話に聞いていた通り、本当に小さな礼拝堂であった。私は礼拝堂の中に入り、その場にあった長椅子にしばらく腰掛けていた。

そこでは何ら特別な感情が芽生えなかったがゆえに、特別な時間であったと言える。どれだけそこに座っていたのだろうか。立ち上がる準備ができた時、私は礼拝堂から出て、町を少し散策をして再び来た道を引き返した。

礼拝堂にせよ、この町にせよ、小さなものには特別な何かが宿っていることに気づかされた。そして、 小さなことに全てが宿るというのは、全ての事物に通じる真理のように思われた。そうではないだろう か。2017/4/10

926. 【ザルツブルグ訪問記】今が永遠に、永遠が今に変わるとき

再び読みに読み、書くに書く生活が始まるとなると、私は居ても立っても居られない歓喜に包まれる。 ウィーン国際空港を出発し、オランダに向かう飛行機の窓からは、ドイツ上空を覆う分厚い雲が眼 下に見えた。これからどのような分厚い雲が自分を取り巻いたとしても、もはや私はそれらの雲を突 き破ることができる。これは譲れぬ確信であり、ある種の覚悟と言えるかもしれない。

オーストリアへの旅行の前後において、もう一度私は外側の世界と内側の世界の双方が重要であることを確認した。物質的な外面世界を強調するのでも、精神的な内面世界を強調するのでもない。 両者はともに、このリアリティを構成するために無くてはならないものなのだ。両者の存在を等しく認め、両者を通じて生きることが大切なのであり、決して片方の極に向かって走ってはならない。外側の世界には常に内側の世界が関与し、内側の世界には常に外側の世界が関与していることを忘れてはならない。そのようなことを最近改めて思う。

オーストリアで過ごした一週間は、私にとって何物にも代え難い体験となった。言葉が麻痺するほどの、存在が静かに震撼するほどの体験の渦に飲み込まれるような七日間だったように思う。オースト

リアへの旅行までの日々は、敬虔な念の中で規則正しく刻み込まれるような毎日であった。毎日の 就寝前に、常に神妙な思いの中で一日を終えていたことを思い出す。

一日という一つの時間単位が一秒と変わらぬような速さと重さで過ぎ去っていくように感じられた。 一方、オーストリアでの七日間は、振り返ってみればあっという間だったのかもしれないが、とても長く感じられるような時間密度を持っていた。

時間という現象は大変興味深く、それを超越した世界で生きる時、一日という単位が一瞬にも永遠にも感じられるのだ。いや、一日を構成する一秒一秒は、一瞬であるのと同時に、即永遠になるのだ。ここに私は、永遠の中で生きる道を見出したと言っても大げさではないだろう。一粒の砂は無限であり得るのと同じように、一瞬の時間は永遠であり得るという真実を忘れてはいけない。その真実を通じて生きなければならないのだ。ここに一人の人間が深く生きることの道が存在しているように思う。

ウィーンでシューベルト記念館を訪れた時、今の私と同じ年齢でこの世を去ったシューベルトに思いを馳せていた。記念館にひっそりと展示されていたシューベルトが掛けていた眼鏡を眺めながら、この偉大な作曲家が見出した永遠性を私も共有し始めたような気がしていた。

シューベルトと同じく若くしてこの世を去ったモーツァルトにしても同様だ。彼らはともに、短い期間で人生の幕を閉じたが、幕が閉じられる前に、彼らは永遠の世界に参入していたのだ。

人の一生の長さに実は大差などない。生きる時間の長さに大差がないのであれば、なぜ深く生きようとしないのか。深く生きることは永遠の世界に至る唯一の道であり、永遠の中で生きることだと思うのだ。また、永遠の中で真に生きる時、過去に戻ろうとするような作為や未来に進もうとする作為も生まれてこないはずである。常に今というこの瞬間の中で生きることを通じて、日々が、そして一瞬が、常に永遠の相を帯びたものとなる。

確かに私たちは、永遠に生きることはできない。だが、永遠に生きることは不可能でも、永遠の中で生きることは可能なのだ。毎日が、日々の一瞬が、常に永遠なものに触れていることを実感し始めた私は、なぜだかそのようなことを思うのだ。2017/4/10

927. 【ザルツブルグ訪問記】開かれた眼を通じて生きること

ウィーン国際空港からアムステルダム国際空港に無事に戻って来た。アムステルダムに到着してす ぐに気づいたが、ウィーンに比べて幾分か気温が低い。季節は四月を迎えているが、オランダでは 春の暖かさとともに、朝夕はとても冷え込む日が続いているようだ。

アムステルダムに到着した瞬間に、絵も言わぬ安堵の思いが湧き上がってきた。それは自分の街に戻って来たという感覚であり、同時に、これから再び自分の仕事に打ち込むことができるという安堵感であった。読み続け、書き続け、感じ続け、考え続ける日々の中に再び身を委ねたい。

ウィーンやザルツブルグでの滞在を通じて得られた、言葉を麻痺させてしまうような体験の渦から私は再び戻って来た。対象から一度離れることは、対象のさらに奥に入り込むことを可能にする。オーストリアに行くまでの生活の中で、没入しているものが仮にあったのであれば、私はそれらから離れたことによって、これまでとは比べものにならないほどそれらの深くに入り込めそうな気がしているのだ。

旅というのは本当に不思議な営みである。これまでの拠点から新たな場所に移動をすることによって、過去の拠点が新たなものになっているのだ。これは心の眼を通じて旅というものを眺めてみると明らかである。ウィーンとザルツブルグに滞在中、私が書き綴っていた日記のいくつかは、もしかすると肉体の眼を通じて見えたことだけが記述されているに過ぎないかもしれない。

オーストリアに滞在中の日々の中で、私は心の眼が閉じられていたのかもしれないと思われた。しかし、それは少しばかり解釈を誤っていることに今となれば気づくことができる。私の心の眼は決して閉じられてなどいなかったのだ。それとは全く逆に、心の眼が全開であったことに気づく。

これまで開かれることのなかった心の眼の一部が、全て開いたのだ。その結果、私は、この世界が 心の眼に開示する豊穣な意味に圧倒されていたのだと思う。私はここから再び、新たな眼で世界を 見ることができるような気がしている。同時に、新たな眼を通じて得られたことをこの世界に還元する ための新たな関与を行えるような気がするのだ。 肉体の眼だけを通じて世界を眺めないこと。肉体の眼だけを通じて得られたことを文章の形にしないことが大切だ。心の眼を通じて世界を眺め、そこで得られたことを文章の形にしていくのだ。これは心の眼を通じて世界を眺めていた過去の偉大な人物の書物を読むときでも同じだ。心の眼を開いて世界を感得していた人間の文章は、決して肉体の眼だけを通じて読んではならない。心の眼を通じてそれらを読まなければならないのだ。

アムステルダムからフローニンゲンに向かう列車の窓から見える景色は、果てしなく平坦だった。この平坦な景色の中に、自分や他者の起伏に富んだ人生が見えなければならない。刻一刻と変化する列車の揺れの差異に気づき、自分や他者の内面世界の起伏を掴まなければならない。果てしなく平坦な世界を揺れながら歩き続けると、終着駅に到着し、そこから再び歩き始めることができるのだ。

列車が間もなくフローニンゲン駅に到着する。ここから私は再び歩き始めたいと思う。2017/4/10

【追記】

偶然ながら、昨日手に取った横山大観の画集の中で、大観が同様の指摘をしていたことを思い出した。「絵はどこまでも心で描かねばならぬということを忘れてはならない。心により筆生ずる」という言葉はまさに、心眼を用いてこの世界を捉え、それを表現していくことの大切さを語っている。

肉体の眼だけをもってしては、事物の本質など見えてこない。心眼を通じて事物と真摯に向き合い、 森羅万象に潜む霊性を表現したことに大観の偉大さがある。自然の持つ霊性をいかに表現するか という大観の師であった岡倉天心の思想を受け継ぎ、それを絵画として現実のものにしたことに、 大観の真の偉大さがあるように思える。フローニンゲン: 2018/5/5(土) 10:53

928. つぼみから花へ: 早朝の静かな誓い

オーストリアからフローニンゲンに戻ってきてから一夜が明けた。昨夜就寝前に、自分の寝室で眠ることの安心感を改めて感じた。ウィーンにせよザルツブルグにせよ、ホテルがあった場所は街の中であったため、周りの環境が完全なる静寂に包まれていたかというとそうではない。一方、就寝前

に自宅の寝室で横になった時、現在の住居を取り巻くあまりの静寂さに驚かされ、そして、改めて 有り難さを感じた。

このような静けさの中、毎晩しばらくの時間、仰向けになって自分の心身を整えるようなことを行っている。昨夜改めて気づいたのは、この儀式的な行いがまさに観想的な意識に私を誘うということであった。

旅行中は、朝から予定が入っていたため、早く起きる必要性を無意識が感じ取っていたのか、早朝 未明に何度か目覚めることが多かった。だが、昨日はもはやそのようなことはなく、非常に深い睡眠 を取ることができた。

目覚めてからの行動は、オーストリアへ旅をする前のものと全く変わりのない習慣的なものだった。 毎朝の習慣的な実践をしたところで、書斎の窓から外を眺めた。すると、一週間前にはまだつぼみ であった木に、真っ白い花が咲いていた。一階の庭に植えられた木に咲く白い花を見下ろしている と、少しばかり感慨深いものがあった。

四月も二週目に入ろうとしているにもかかわらず、フローニンゲンは相変わらず寒く、昨夜駅に到着した時、冬用のジャケットとマフラー、そして手袋が必須であるほどに寒かった。寒さが依然として続く環境の中で、この一週間の間にその木に白い花が咲いていたことは、小さいながらも深い喜びを私にもたらした。

木に咲く白い花々が、朝の冷たい風に小さく揺られている。その様子を眺めながら、オーストリアへの一週間の旅を経て、自分の内側にある何らかのつぼみも開花したように感じた。目の前に咲く白い花を認識するのとは違い、肉体の眼を通して内側の花を見ようとしていては何も見えてこない。だが、心の眼を通じてそれを見ようとすれば、間違いなく自分の内側で新たな花が咲いたことを知ることができる。

人間の発達には確かに長大な時間がかかる。だが、発達の瞬間は常に非連続的であり、一瞬のうちにやってくる。

オーストリアへの旅行を経て、自分の内側で何かが静かに決壊したようなのだ。もはや私は、内側のものを外側に形として創造することに何らためらう必要はない。創造の流れをせき止めてはいけない。流れ出てくるものを妨害することなく、それらに命を吹き込むこと。命を吹き込むのは、自分の言葉であることを忘れてはならない。

静かに沸き立つような感情に包まれながら、そのような誓いを立てずにはいられない朝だった。 2017/4/11

929. 旅を終えてのこれから

オーストリア旅行から戻ってきてからの最初の朝を迎えた。旅の途中でも時間を見つけて日記を書き留めていたのだが、正直なところ、旅を通じて得られたものの内、ごくわずかなことしか書き留めることができなかった。また、旅の最中において、言葉にならないような真の体験に襲われることが幾度となくあったため、言葉の感覚が麻痺していたように思う。そうしたこともあって、旅行中では思うように日記を書き留めておくことができなかった。

フローニンゲンに戻ってきた今日から少しずつ、旅での体験を咀嚼するような時間を設けたいと思う。 静かな書斎において、これまでと同じように自分の仕事に打ち込む中で、オーストリアでの旅の体験が思い出されたら、その都度文章の形にしておきたいと思う。

あの旅が確かに自分の人生の中に存在していたということを忘れないためにも、そして、あの旅が 私にもたらした確かな変容の兆しを逃さないためにも、旅を通じて湧き上がってきた思考や感覚を つぶさに書き留めておきたいと思う。

一つの旅が形式上終わりを告げたとしても、それは内側の世界では終わりを告げていない。終わり どころか、内側の世界では、形式上の旅の終わりを持ってして、新たなことが始まるのだ。この始ま りを静かに見守り、それが適切な発酵を迎えることを祈ってやまない。

今日から再び日常の仕事に戻る。その中でも今日は、「創造性と組織のイノベーション」のコースで 課せられている論文を再度読み込んでいくことを優先的に行いたい。というのも、このコースの最終 試験が明後日に控えているため、今日と明日は特に集中的に学習内容を確認する必要があるだ ろう。オーストリアでの旅の道中も、このコースで取り上げられた論文を読み進めていた。そのおかげで、今日からはコースの後半で取り上げられた論文だけに集中することができる。具体的には、 創造性と認知、組織の創造性とイノベーションの創出というテーマに対して理解を深めていくことになる。

まずは講義レジュメを一読し、その後、取り上げられた論文を読むことによって、講義の内容を肉付けしていきたい。こうした作業を全て終えることができたら、各回のクラスの内容の中で、重要な概念 や理論、そしてテーマについて、自分なりに文章の形でまとめておきたいと思う。

願わくば夕方からは、修士論文の修正・加筆を行いたい。昨日、アムステルダム国際空港からフローニンゲンに戻る列車の中で、交差再帰定量化解析(CRQA)に関する資料を眺めていると、大きな発見があった。夕方からは、その発見が実際に自分の研究データにうまく適用できるのかをプログラミング言語のRを用いて検証したい。今日から再び、読みに読み、書きに書く日々を送ることになるだろう。2017/4/11

930. 場所だけに宿る精神

オーストリアの旅から帰ってきても、やはりその余韻が依然として自分の内側に残っている。四六時中、観想的な意識状態にあり、全ての事柄を自覚的に目撃することができる。

今日からフローニンゲンでの生活が再び開始されたのだが、昨日までの旅行を少しずつ咀嚼しようとするような運動が私の無意識の中で起こっている。それを証明するように、先ほどもウィーンとザルツブルグに滞在していた時のことを知らず知らず回想していた。

ザルツブルグに滞在中ふと、フローニンゲンの自宅に戻ったら、書斎に置かれたソファの一部のスペースを芸術の世界に入るためだけの空間にしたいと思った。備え付けのソファは非常に大きなものなのだが、これまでそのソファは本来の役割を果たしていなかった。というのも、ソファ全体に書籍や論文が積み重ねられ、人が座れるスペースは全くなかったのだ。だが、ザルツブルグに滞在した時に、突如として、ソファの一部を腰掛けられるようにし、美術館で購入した画集や様々な博物館で購入した資料を閲覧できるようなスペースにしたいと思った。

実際に、昨夜フローニンゲンに戻ってきた時に、就寝前にそのスペースを作った。今日は夕方の仕事を終えた後、ソファのその場所に腰掛けた。そして、ウィーンのベートーヴェン記念館で購入した、難聴に苦しむベートーヴェンが執筆した遺書をおもむろに手に取り、遺書の世界の中に入り込んでいた。

この遺書については、以前の日記に書き留めていたように思う。そのため、ここでは再度遺書の内容について取り上げることはしない。しかし、その遺書を読みながら感じていたのは、場所だけに宿る精神の存在だった。

この遺書が書かれた「ハイリゲンシュタットの遺書の家」に実際に足を運び、その場でこの遺書を読んだ時、私はそこにベートーヴェンの精神が依然として宿っていることに気づいた。これは誇張でも何でもない。

私たちは書物を通じて、あるいは人づてにある偉大な人物についての情報を得ることができる。だが、その人物が実際に生活をし、実際に活動に打ち込んでいた場所には、単なる情報を超えたものがそこに存在していると思うのだ。

ハイリゲンシュタットの遺書の家の周辺は、ベートーヴェンが実際に歩いていた場所だ。そしてこの家は、ベートーヴェンが実際に暮らしを営み、今私の手元にある遺書を書いた場所である。その場で私が包まれていた感覚は、何かに取り憑かれたような感覚であった。あるいは、私の存在に新たな何かが宿ったような感覚であったと言っていいかもしれない。

こうした感覚は、ウィーンで訪れたモーツァルト記念館、シューベルト記念館、フロイト博物館、そしてザルツブルグで訪れたモーツァルト博物館においてもほぼ同じように引き起こされた。それらの場所には、彼らが高めた精神が未だに宿っているのだ。

彼らが実際に生きていた場所に足を運ぶこと、何らかの作品が生み出された場所に足を運ぶことは、彼らの存在や作品に宿る精神に触れることに他ならないのではないだろうか。そこには、偉大な才能を育んだエネルギーが一点に凝縮しており、特殊な磁場が形成されている。そのように思えて仕方ない。

場所という物理的な空間に、精神的なものが間違いなく宿っている。そうでなければ、それらの場所に足を踏み入れた瞬間に、なぜ私の精神があれほどまでに振動していたのかについて説明がつかない。私がこれからの日々で行っていく必要があるのは、今回の旅で訪れた場所だけに宿る精神の一つ一つと時間をかけて向き合っていくことだろう。2017/4/11

931. 知識体系の発達と差異

オーストリアからフローニンゲンに戻ってからの二日目の朝を迎えた。フローニンゲンに到着した夜と同様に、昨夜も十分な睡眠を取ることができた。相変わらず、睡眠の直前は不思議な意識状態になる。昨夜も、非常に研ぎ澄まされた静かな意識状態の中で眠りに落ちた。起床直後、ザルツブルグで開催された非線形ダイナミクスの学会について振り返っていた。

欧米を中心に、各国から様々な研究者がこの学会に参加していた。中には、コーチングを生業とする人たちも学会に参加しており、彼らは一様に、人間発達に非線形ダイナミクスの考え方を導入する実務的なヒントを得ようとしているようだった。

私も研究と並行して発達支援コーチングに携わっているため、今回の学会が発達支援の実務に有益な知見をもたらすものであったことを実感している。特に学会の発表では、非線形ダイナミクスをサイコセラピーに活用した研究が多数取り上げられており、それらの研究成果はコーチングにおいても有益なものだった。サイコセラピーにせよ、コーチングにせよ、それらは非線形的な挙動を見せる人間の複雑な心に関与するという特徴を持っているがゆえに、非線形ダイナミクスの知見は当該実務領域に携わる者にとって不可欠だと改めて強く思った。

学会は最終日を除き、三日間を通じて基本的に朝から晩まで行われた。私にとって馴染みのない 分野の発表もあったし、発表内で取り上げられている概念や理論なども馴染みのないものが多かっ た。そのためか、今回の学会を通じてかなりの量の新たな知識が自分に向かって流れ込んでくるよ うな感覚がした。そうした大量の知識をその場で全て咀嚼できるはずはなく、知識体系の構築運動 が少し麻痺するような感覚があった。

参加者の何人かと雑談をしていると、同様のことを述べる者がいた。その場で咀嚼しきれなかった 知識は、これからじっくりと時間をかけながら自分なりに理解を深めていく必要があるだろう。学会で の発表というのは、そうした行為に私たちを促すきっかけにすぎない。逆に、そうしたきっかけを逃すことなく、自らの知識体系を確固とするための歩みを着実に進めていくことが大切になる。そのようなことを思った。

昨日、「創造性と組織のイノベーション」のコースで課せられている25本ほどの論文を通読した。明日の最終試験に向けて、今日もそれらの重要な箇所を読み返す必要がある。それらの論文を読みながら、初読の時の自分とは違う場所に今の自分がいることにはたと気づかされた。これは目新しい気づきではないかもしれない。

だが、私にとっては、初読の時と再度論文を読み返した時の自分を比較し、そこに差異を見出すことが何よりも重要だった。それらの差異は、変化と呼ぶこともできるだろう。あるいは、ミクロな発達と呼んでもいいと思う。初読から二ヶ月ほどしか経っていないにもかかわらず、それらの論文から見出す意味とその深さが異なることに純粋な驚きがあった。

観察の眼をより研ぎ澄ませてみると、一週間前にフローニンゲンからウィーンに向かう最中に読んだ 論文を再度昨日読み返してみると、そこから汲み取れる範囲と深さが異なっていたのだ。これは驚 くに値することではないだろうか。

人間の知識が深まるという現象は、私を虜にする何かが依然として潜んでいる。初読時と再度時に おいて、知識体系の不可逆的な発達が起こっている。

とても奇妙なのだが、一度書物や論文を読んでしまうと、記憶の忘却があったとしても、以前の状態に戻れないのだ。これは非常に奇妙な現象であり、興味深いものでもある。再読時に知識体系が深耕されるのは、既存の知識や体験が再読という行為を通じて差異を生み出すような運動を自発的に行っているからではないかと思った。そう思った瞬間に、これはダイナミックシステム理論で言うところの「自己組織化」に他ならないと気づいた。

そもそも知識体系が自己組織化を絶えず行うことができるのは、知識体系自体が一つの生態系として生きているからであり、私たちの内側の変化や環境という外側の変化が触媒となって、知識体系自体が変化し続けているからだろう。

本日、再びそれらの論文を読み返すことになるが、その際にどのような差異を自分の内側で見つけることができるだろうか。差異を生み出すことが難しいのではなく、差異に気づくことが難しいのだ。なぜなら、差異は絶えず自分の内側で生まれており、それはとても微細なものとして常に立ち現れているからである。2017/4/12

932. 旅の経験から教えられた重要なこと

オーストリアからフローニンゲンに戻ってきてから、起床直後に10分ほど体を動かす際に聴く音楽が変わった。旅行中においても、その他の朝の習慣的な実践ができなくても、身体を活性化させることだけは行っていた。

精神的な実践よりも先に、必ず身体的な実践がなければならないと私は思っている。そのような考え方から、ウィーンのホテルでも、ザルツブルグのホテルでも、起床直後に必ず時間をとって身体を目覚めさせる実践から一日を始めていた。その際に聴いていたのは、モーツァルトが残した透き通るような交響曲だった。これまでの私は、ピアノ曲を好む傾向があったのだが、最近になって再び交響曲の魅力に気づき始めた。

そうしたこともあって、モーツァルトが作曲した交響曲を聴きながら身体を動かすことが新たな習慣になりつつある。それらの交響曲は、全身の細胞を活性化させるような音の響きを持っており、思わず飛び跳ねたくなるような音の流れを持っている。心身を活動的な状態に促すモーツァルトの交響曲を聴きながら身体を動かすことは、一日の始まりに無くてはならないものとなるだろう。

ウィーンに旅立つ前、オーストリア滞在中に経験について考えを深めることを自らに課していた。だが、オーストリア滞在中に事前に設定したその課題について向き合うことは全くなかった。その理由の一つは、経験について考えること以上に重要な問いや体験がそこにあったということだろう。ウィーンに旅立つ前に書き留めておいたメモを読み返すと、「経験(experience)の接頭辞 "ex"は、「前」かつ「出る」という意味があり、それらが何を意味するのかを考える」ということが書き留められていた。

そういえば、旅の途中に書き留めていた、旅がもたらす自己回帰という現象は、どことなくメモに残されたテーマと関係しているように思えたのだ。今回の旅の経験を改めて振り返ると、経験には前の

自分と繋がりながらもそれを超え出て行くという性質があるようなのだ。まさに、旅は以前の自分を携えながら新たな土地に足を運ぶことであり、そこで経験されることは、それ以前の自分を超え出て行くことなのである。また、今日の朝一番に書き留めていた、知識体系が差異を生み出しながら絶えず発達していくということも、それらと密接に関係している。

それら全ての中に、「前」かつ「出る」という、経験が持つ二つの特徴が色濃く現れていることに気づく。経験には、さらに興味深い特徴がある。それは、以前の状態から超え出て行くだけではなく、超え出た瞬間の自己は再び新たな「前」の状態になるということだ。ダイナミックシステム理論の観点を用いれば、それは「反復」という現象だと言い換えることができるだろう。

つまり、経験は、以前の状態から超え出て行くことを私たちに促しながらも、再び新たな「前」の状態に置き直す作用を持っているのだ。絶えず自己を超えていきながらも、絶えず自己に戻ってくるという自己回帰の体感は、まさにこういうことだったのだと腑に落ちた。

今の私は、もはや自己を超越することに対して何の迷いもない。絶えず自己を超越する道を歩むことは、絶えず自己に帰還する道を歩むことに等しいのだ。だから、私はもはや何の躊躇もなく、超え出る限りの境地まで超え出ていきたいと強く思う。それこそが、自己の「最奥の最奥の最奥」に存在する人間本質に辿り着くことだと思うのだ。2017/4/12

933. 創造性の四つの段階

「創造性と組織のイノベーション」のコースで取り上げられた論文を読みながら、創造性に関する発達段階モデルについて少しばかり思いを巡らせていた。この論文は、アムステルダムからウィーンに行く最中にも目を通しており、その時にもこの段階モデルが少々気になっていた。

以前書き留めていたように、産業組織心理学の文脈における創造性の発達モデルは、四つの段階を定義している。それは、創造性の初期の段階から順番に、mini-c, little-c, pro-c, Big-Cである。 創造性の発達を研究する分野において、これまでは、過去の偉人たちが発揮したようなBig-Cの創造性に着目するか、もしくは、一般の人たちがある特定領域の中で創造的な行為を生み出すmini-cという小さな創造性に着目するかのいずれかに研究の焦点が当てられていた。つまり、既存の創 造性研究の対象には偏りがあるということである。そこから現在は、mini-cの次に到達するlittle-cの 創造性や、little-cからさらに発達したpro-cの創造性にも研究の光が当てられている。

ウィーンに向かう最中、そして今朝も改めて重要性を噛み締めていたのは、little-cの段階に該当する創造性である。これは高度な創造性を発揮するための種を見出していく重要な段階であり、一般の人たちでもこの段階の創造性を発揮していくことは十分に可能である。この段階で発揮される創造性の特徴は、個人の内側の閃きや意味に尽きる。

私たちは普段何気なく、様々な閃きや重要な意味を内側で生み出している。だが、私たちの多くは それらと真剣に向き合うことをせず、結果として、貴重な閃きや重要な意味は跡形もなくどこかに消 えていってしまう。このような状態においては、自らの創造性を養うことは決してできないのだ、という 強い思いに旅の途中で掴まれた。自らの専門性を確立し、高度な能力が発揮できるようになるprocの段階に至るためには、何よりもまず、このlittle-cの段階を大切にしなければならない。

独自の体験や知見の相互作用によって生み出される、個人の内側にもたらされる閃きや意味ほど 貴重なものはない。ただし、それらの存在に気づくだけでは全くもって不十分だ。それらをいかに形 として外側に表現するかが極めて重要であり、そうした外面化の過程がなければ、little-cの創造性 は一生育まれることはないと言えるだろう。私が内側の思念や感覚を絶えず文章の形にしようと思っ たことの裏側には、何かそのような事実と関係しているように思えて仕方ない。

今この瞬間に言葉となって現れた、自分の内側の閃きや意味を眺めていると、確かにそれは、私という一人の人間が産み出した小さな創造性だと言えることに気づく。

今回の旅でもたらされた諸々の体験に少しずつ言葉を与えることを行いたい。それらに言葉を与えることによって初めて、それらは生命を持った形で外側の世界に姿を現わす。そして、生命を持った内側の閃きや意味は、新たな創造性を導いていく。そうした過程を経ることによって、私たちの創造性はゆっくりと発達していくのだろう。

今回のオーストリアの旅を終え、またしばらくはフローニンゲンで日々の探究活動に打ち込みたいと 思う。可能であれば六月末にハンガリーのブダペスト、七月末か八月にノルウェーに足を運びたい。 当初の予定では、この夏にギリシャとエジプトへ行く予定だったが、それらの場所がまだ自分を強く 呼んでいない。ブダペストとノルウェーでは、それぞれの地にまた一週間ほどゆっくりと滞在したいと思う。その日に向かって今日から再び歩き出したい。2017/4/12

934. 横山大観の名作『趁無窮』より

ウィーンとザルツブルグではあれほどまでに天候に恵まれ、街行く観光客の幾人かが日中に半袖で活動していたのに対し、フローニンゲンの街は未だに寒さが残っている。実際に、今日は朝から部屋の暖房を入れる必要があった。こうした寒さのみならず、午後からは雨が降り出し、オーストリアで傘を一度もさす必要がなかったことが嘘のようである。依然としてフローニンゲンの天気は、次の季節に向けての移行期間にあるようだった。

寒さや雨を日常生活における素晴らしい外的変化とみなしながら、今日は朝から論文の読み込み作業を行っていた。「創造性と組織のイノベーション」のコースの最終試験が明日に迫っており、午前中にこのコースで取り上げられた全ての論文を読み返していた。このコースは産業組織心理学のものであるがゆえに、若干研究アプローチが旧態依然としており、創造性やイノベーションという本質的にダイナミックな事象をうまく取り扱うためのアプローチが当該分野の研究にまだ導入されていないことを見て取ることができる。

これまで私が探究を続けてきた構造的発達心理学の観点や、非線形ダイナミクスやダイナミックシステムアプローチといった領域の理論や手法を用いれば、創造性やイノベーションに関してこれまでにはない発見事項が得られるに違いないと確信している。そうした目を持ちつつも、午前中に読み返していた論文のいくつかは、面白い研究成果を示していた。

私が創造性の発達に関心を持っているがゆえに、ウィーンやザルツブルグで偉大な創造者の博物館や記念館を訪れることになったのか、それらの場所に訪れることが私の関心を創造性の発達に向けたのか定かではない。おそらく、両者の因果関係は一方向的なものではなく、双方向的かつ相互作用的なものだろう。また、私が意識するとしないとにかかわらず、これまで私は様々な偉大な創造者の博物館や記念館に足を運んでいたことを思い出す。

そうした場所を訪れることを通じて、私の中で創造性を開拓する一筋の道が今明瞭に見え始めたと 言っていいだろう。見えたのは、創造性を涵養していく過程であり、創造的なものをこの世界に生み 出す法則性である。これらのものをようやく掴みつつあることは、何にも代えがたいほどの感謝の念を私にもたらす。領域は全く異なれど、すでにこの世を去った偉大な創造者たちは、創造性を育むプロセスと創造的なものを創出する法則を私に授けてくれたような気さえするのだ。こうした気持ちは、旅を重ね、偉大な創造者たちが全てを捧げて活動した場所を実際に訪れることによって引き起こされたものだ。

昼食後の仮眠を終え、降りしきる雨を見ながら、私はソファの一角に腰掛けた。いつも昼食後の仮 眠を終えたら、コーヒーを入れて再び仕事に戻る。だが、今日からは行動に少しばかり変化が見ら れた。

仮眠を終えた直後に、横山大観の画集を見たくなったのだ。ちょうどウィーンからフローニンゲンに 戻ってきた夜に、専門書と論文の山を動かし、座れるようにソファの一角にスペースを作った。そこ に座って音楽を聴きながら、美術館や博物館で購入した資料を眺めることをしたいと思い立ったの は、ザルツブルグに滞在していた時だった。実際に今日からそれが実現した。

先ほど、横山大観が生涯のうちに残した作品のうち、大部分が収められている画集を眺めていた。 これは昨年の年末に、家族で島根県の足立美術館を訪れた時に購入したものだ。そこで見た大観 の作品には圧倒されるものがあり、画集でもいいからそれらの作品を常に眺められるようにしておき たかった。この画集に収められている大観の作品を順に追っていくと、画家としての大観の技術的 かつ内面的な成熟過程を見て取ることができる。

それらをゆっくりと辿っている最中、思わず手を滑らし、晩年の大観の作品にページが飛んでしまった。そのページには、大観が84歳の時に創作した『趁無窮(むきゅうをおう)』が大きく取り上げられていた。この三文字が描かれた墨書を目にした時、強大な求心力を感じた。それらの文字の意味がわからなかったため、解説文に目を通すと、それは大観の師であった岡倉天心が芸術の理想について語ったものだということがわかった。

「趁無窮(無窮を追う)」というのは、永遠に完成することのない芸術に関して、無限のものを追求していくという意味であり、この作品は大観の信条の表れであった。私がこの作品に引き込まれるものを感じたのは、大観が本当にこの言葉を作品の中に体現させながら芸術に打ち込んでいたからだ

と思った。この三文字には、大観の魂が込められているのだ。絵画に魂を入れるというのは、全くもって不可能なことではなく、現実的すぎるほどに現実的だと思った。

そして、魂を込めることができるのは、絵画に限らず、人間が生み出す全ての創造物に当てはまると思うのだ。大観の作品を眺めながら、一つ一つの作品に魂を込め、他の魂と共振するような作品を自分も創造していかねければならないと心新たにさせられた。午後から夜にかけて執筆する論文の一文一文に、それを体現させていきたい。2017/4/12

935. 内側のさざ波と静かな音

全ての事柄が、「これで良いのだ」という思いの流れの中で進行していく。ウィーンとザルツブルグを訪れて以降、全ての事柄が流れていく進行を静かに見守っている自分がいる。これは、形而上学に関する中途半端な知識から生み出された、「全てをありのままに受け止める」という偽言や「流れの中に身を委ねる」という戯言ではなく、全てを崩壊させた後に訪れる再建の時を待つ感覚に等しいと言えるかもしれない。

全ての事柄を破壊し尽くし、全てのものを焼き払った後に訪れるような、新たな開始を待つ静けさの中に今の私はいるような気がする。ウィーンとザルツブルグに足を運び、そこで様々なものを五感を通じて体験したことは、間違いなく私に大きな影響を与えていた。

最近思うのは、自己に及ぼす変容作用が大きければ大きいほど、それは静かなのだ。思うに、一つの体験が真に自己変容を及ぼす時、それは派手な交響曲のように自己に響き渡るのではなく、小さな音を鳴らすピアノ曲のように自己の内側で響くのだろう。

とても小さな連続的なさざ波が、私の内側で絶えず寄せては返す運動を行っているのがわかる。真に自己変容をもたらすのは、一度限りの大きな波というよりも、小さな連続的な波の絶え間ない運動だと思うのだ。

ウィーンとザルツブルグに訪れている最中、そしてフローニンゲンに戻ってきて以降、これまで見落としていた内側の小さな波が絶えず運動を続けているのがわかる。なぜこれまで、こうした小さな波の運動に自分は気づかなかったのだろうか、と思わざるをえない。それは明々白々とした内側の波

である。今この瞬間において、太平洋や大西洋のどこかの海岸で、波が動いているのと同じぐらい自明なことである。

太平洋や大西洋の波について言及するまで、それらが今この瞬間において常に運動を続けている ことを意識できなかったのと同じように、内側の波も私たちの意識を超えたところで常に動き続けて いるのだ。それは、発達の波と形容していいようなものである。

ウィーンとザルツブルグに訪れて以降、自分の内側で静けさを感じるのは、その旅のどこかで私が 創造を司る津波のような大きな流れに飲み込まれたことと関係しているかもしれない。それは確か に一時的な大きな波であることに間違い無いが、その体験に囚われては決してならない。

大きな津波によって、自己を取り巻く様々な不純物が打ち壊されたような感覚がある。それが冒頭で述べていたような思いに繋がっているのだろう。

外側に聞こえるのは、書斎の中で静かに鳴り響く音楽と窓の外の小鳥の鳴き声や時折走る車の音である。そして、内側に聞こえるのは、自分の本当の声だけである。2017/4/13

936. 肯定·承認·共感

ウィーンとザルツブルグを訪れることによって、自分の生き方が揺るがないものになったことは予期 せぬ出来事であった。欧州に渡る前、そして渡欧後のしばらくは、自分の生き方を絶えず批判する ような自己を隣に置き、批判の極致まで自分の生き方を検証するようなことを強いられていた。それ は、私から見ても痛々しいものであったことに間違い無いが、そうした批判なくしては、自らの確固と した生き方を打ち立てることができない状況にあったと言える。

ウィーンとザルツブルグでは、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、フロイトなどの偉大な創造者たちの記念館や博物館を訪れた。それらの場所を訪れることを通して、様々な気づきや発見が得られたのは間違いない。そうした気づきや発見の中で、最もシンプルであり、なおかつ最も大きなものは、「それでいいのだ」というメッセージをそれらの偉大な創造者たちから受け取ったことだった。

それは、何かを創造することに関して私が辿っているプロセスに対する肯定であり、私の生き方そのものに対する肯定であった。こうした肯定は、私の心臓の芯に触れ、新たな心臓を再び動かし始めてくれるような感覚を引き起こした。

旅の途中で感じていたことをふと思い出す。それは、全ての迷いが払拭され、雲が晴れるような感覚ではなく、雲の上の世界に足を踏み入れるような感覚であった。それについては過去の日記に書き留めていたように思う。

これからの私の人生の中で、迷うことはたくさんあるだろう。しかしながら、創造することに関して、そして、生き方に関しての迷いをもはや超越したような感覚が旅の途中で得られたのだ。ゆえに、一時的な曇りや晴れに右往左往するのではなく、そもそも雲を生み出す場所さえも超越してしまったという感覚は、とても真っ当なものに思える。

オーストリアへの旅に出かける前に、この世界で生きていくのは確かに難しいが、それよりも難しいのは、この世界とどのような関係を結びながら生きていくかということだ、という意味のメモをノートに残していた。仮に、この世界が創造の波に支えられたものであるならば、私がこの世界とどのような関係を持ちながら生きるかという問題に関しても、もはや解決されたような気がしている。

旅の途中で出会った偉大な創造者たちからの伝言に基づき、自分も創造の波の中で何かを絶えず生み出すことに寄与し続けるという関係をこの世界と結ぼうと思ったのだ。それを思ったというよりも、もはやそれをしなければ生きることのできない淵に立たされたような感覚が私を捉えた。そして、それを何の迷いもなく受け入れることによって、淵が消え、新たな道ができた。

その道の先には何も見えないが、確信だけがその道の上に横たわっている。ウィーンとザルツブル グの旅を通じて得られたのは、観光名所を訪れたことによって獲得された知見でも体験でもなく、生 きることに関する揺るぎのない確信であった。

形のないものに形を与え続けること、創造を待つものをこの世界に顕現させ続けること、私はこの人生でそれしかできない。そうした生き方を根本から承認し、共感してくれたのが、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、フロイトたちであった。2017/4/13

937. 顕現を待つ内側の音楽

オーストリアからフローニンゲンに帰ってきてから、ピアノ曲だけではなく交響曲をかけながら仕事を するようになった。特に、起床直後に身体を動かす際は、モーツァルトの交響曲をかけ、その後に ベートーヴェンの交響曲を二時間ほどかけている。

今もこの瞬間に書斎に鳴り渡っているのは、ベートーヴェンの交響曲である。なぜだかよくわからないのだが、今この瞬間に聞いている二時間ほどの交響曲は、冬の時期ではなく、春から夏に聞くべきものだというような直感がある。とても爽快感に溢れ、躍動感に満ちた音楽が、私をいつの間にやら遠くに運んでくれるような感覚がする。

これまでの私は、音楽というものを物理的な身体を中心にして聴いていたのではないかと反省させられる。音楽は間違いなく心や魂の領域にまで響き渡るものであるし、身体心理学の観点から言えば、音楽は物理的な身体のみならず、サトルボディやコーザルボディにまで染み渡るものなのだ。それに気づかなかった私は、これまで何を聴いていたのだろうか。音楽と内側の体験が結ぶ関係はとても奥が深い。

ふと私は、今から四年前にコネチカット州にあるイェール大学を訪れた時に聴いた鐘の音を思い出 していた。あの鐘の音は、私を捉える何かがあったのを今でも鮮明に覚えている。

ウィーンとザルツブルグを訪問している最中に、私は様々な音楽家の記念館や博物館を訪れた。 私には一切の音楽的な才能はなく、また、音楽的な教育を受けたこともない。だが、私の心の内側 に、なぜか前々から作曲をしたいという思いが静かに横たわっていた。イェール大学の鐘の音を聴 いたとき、私は詩を書きたいという強い思いに掴まれた。

しかし、その後の私は日本語や英語で詩を書くことに大きな意味を見出すことができなかった。今回のオーストリアの訪問で突如として湧き上がってきたのは、日本語や英語を超え、自然言語を超えた音楽という普遍言語で作曲をしたいという強い思いだった。

ザルツブルグを訪問する前に、私はこの町に住む知人から美味しいアジア料理店を教えてもらっていた。学会の最終日の昼食時に、私は学会を通じて知り合った他の研究者を10名ほど連れて、こ

のアジア料理店に訪れた。その帰り道、スイス人の研究者と自然言語に関する話をしていた。その中で、普遍語の創造に関する可能性について少しばかり雑談していた。私は、自然言語から普遍語を生み出すのではなく、そもそも普遍語としての性質を帯びている音楽をもとに、自分なりの創造物を生み出したいと思うようになっていた。

私の内側で、これまでまとまりを見せなかった様々な記憶が徐々に結びつき始めている。自分の内側の記憶と体験が、不思議な糸で次々と結ばれていくかのようである。

私が四年間の米国生活を終え、ロサンゼルスから東京に帰ってくる最中の飛行機の中で、ロシアの作曲家アレクサンドル・ボロディンの交響曲を偶然にも聴いた。特に、『だったん人の踊り』という曲が持つ力強さと躍動感に惹かれるものがあったのを覚えている。曲が終わり、ボロディンという人物の解説を聞き始めた時、私は思わず仕事の手を止め、解説に釘付けになっていた。このような曲を残したボロディンは、本業が化学者であり、なおかつ30歳になるまで作曲を学んだことがなかったことを知ったのだ。

これは私にとって、とても大きな驚きであったともに、私に多大な励ましをもたらした。今の私は、日々の体験を日本語で日記として書き留め、研究を通じて得られた知見を英語で論文として形にしている。これらは、一生涯継続させていきたいと強く望んでいる。しかし、自分の内側では、もはや自然言語では捉えきれないものがうごめいているのを知っている。

それは形としてこの世界に顕現することを待っている音楽的な何かである。それは、私の固有の音だと言ってもいいかもしれない。今の私には、それを表現する方法がないのだ。

もちろん、言葉としてそれらの音楽的なものの一端を、この世界に形として表すことができるだろう。 しかし、それには限界があることが今歴然として私の目の前に立ちはだかっている。

いつか作曲に関する本格的な訓練を受けることを小さな楽しみとして、その日に向けて私は自分の仕事にこれからも邁進したい。2017/4/13

938.「創造性と組織のイノベーション」の試験を終えて

昨日は、「創造性と組織のイノベーション」のコースの最終試験を受けてきた。早朝、自宅からザーニクキャンパスまで30分ほどゆっくりと歩いている最中、先日のオーストリアへの旅を通じて得られた体験を咀嚼する現象が、自分の内側で現在進行形で生じていることがわかった。

四月半ばを迎えても相変わらずの寒さが続いているが、昨日はマフラーを巻く必要はなく、優しく 差し込む太陽の光を浴びながら、自分の内側で起こっている現象に静かに寄り添っていた。旅の 最中、小さなさざ波が自分の内側に無限に流入してくる感覚について、以前の日記に書き留めて いたように思う。この無限の波によって、私の内側に付着していた諸々の不純物が全て洗い流され、もう一度平地から歩みを再開させるような感覚があった。それは劇的な現象ではなく、とても静かな 現象だった。

ザーニクキャンパスに向かう最中においても、内側の静けさは変わることがなかった。人間の内側に、このような静かな世界が広がっていることは、私にとって大きな驚きだった。

近くの運河沿いのサイクリングロードをしばらく歩いていると、試験会場に到着した。歩くという行為 と一体化することによって、知らぬ間に遠いところまで来ていたというのは、仕事に関しても同じだと 思った。

会場に到着し、試験開始まで再び論文のまとめを読み返していた。その後、試験が開始され、全10 間のオープンクエスチョンに答えていった。今回の試験はコンピューター上で行えるため、修正に 関しても非常に楽であり、最初の学期に履修したコースの試験もコンピューター上で行うものであったため、今回は慣れがあったように思う。よく練られた試験問題に回答しながら、創造性や組織のイノベーションに関して、自分が知らず知らず獲得していた知識に気づかされ、少々嬉しい驚きを持っていた。

それらの知識は、このコースを受講しなければ決して獲得することのできなかったものであり、自分の探究と仕事に直接的・間接的に重要なものだと改めて思った。個人や組織の創造性を涵養する支援を行う際に、それらの知識は不可欠なものであり、これまでそうした知識を持っていなかった自分を反省の目で眺めていた。

ほぼ全ての問題に納得のいく形で解答することができ、無事に試験を終えた。試験終了後、会場のロビーで、このコースで課せられている協働論文を共に執筆している、ルクセンブルク人のヤン、ドイツ人のマーヴィン、オランダ人のリサとミーティングをした。

実は、その協働論文はまだ完成しておらず、先日担当教授から最初のドラフトに対して得たフィードバックをもとに、修正・加筆を行わなければならない。四人でしばらく試験のできについて話をし、そこから論文の話に移った。四人の役割分担を行い、今日はその役割に従って論文を執筆していきたいと思う。試験は無事に終わったが、文章を執筆し続けることは終わらない。2017/4/14

939. 一年間に読んだ論文の量について

昨日は、「創造性と組織のイノベーション」の試験を午前中に終え、そのコースで課せられている協 働論文の執筆に向けたミーティングを行った後、社会科学キャンパスに足を運んだ。いよいよ来週 から、フローニンゲン大学での最初の一年目の最後の学期となる。

最後の学期には、「タレントアセスメント」と「成人発達とキャリアディベロップメント」というコースを履修する。前者は、私たちの創造性をどのように測定するのかに関する心理統計学のコースである。一方後者は、成人発達とキャリアの発達の関係性を考える産業組織心理学のコースである。社会科学キャンパスに足を運んだのは、それらのコースで取り上げられている課題論文をプリントアウトするためだった。

図書館に到着し、コンピュータールームで課題論文を印刷していると、それらのコースで課題とされている論文は、合計で50本ほどに及ぶことに気づいた。どちらのコースもこれまでの私の専門と関係するものでありながらも、心理統計学や産業組織心理学の観点から発達測定や成人発達を捉えることは、私にとって少なからず新しい観点をもたらすことが予感された。

実際に、50本の論文をプリントアウトしながらそれらを眺めていた時に、これまでの私にはない観点がそれらの論文で取り上げられていることに気づいた。最後の学期においても、知識の体系の裾野を広げるようなことが私に突きつけられていると思った。これは私にとって喜ばしい要求である。なるべく早い段階で、50本の論文を全て一読しておきたいと思う。今現在、執筆中の論文が3本ほどあ

るが、それらのうちの2本は来週中に完成するであろうから、来週のどこかの時点から本格的にそれら50本の論文を読み進めていきたいと思う。

この一年間を通じて、合計で6つのコースを履修し、それらのコースで課せられている論文は合計で150本ほどに及ぶことがわかった。それらはあくまでもコースで課せられているものであり、その他に修士論文を執筆するために読んでいた論文や、自分の関心に従って読み進めた論文などを含めると、およそ250本ほどの論文をこの一年間で読んできたように思う。

この数に関しては、当初の私が全く予期していなかったものであり、この一年間を振り返ってみて初めて気づいた数だ。正直なところ、読んだ論文の数に重要な意味は含まれていないのだが、それでもこの一年間で気づかない間に随分と論文を読んでいたものだと驚かされた。

しかも、6つのコースを受講しなければ、決して発見することのできなかった論文と出会うことができ、 それらは自分の探究領域を押し広げるような役割を担っていた。また、科学論文ばかりを読むので はなく、時に休息として、自分の関心のある専門書を読み進めていたことは、私の内側に調和をも たらしたように思う。特に、自分の関心テーマに関する哲学書を読むことは、探究活動の刺激になり、 そこから励ましを得ると同時に、私の心を休めてくれるような働きがあったように思う。一年目のプロ グラムも最後の学期となったが、これまでと変わらず、多数の論文や専門書と向き合い、文章を執 筆していくということを継続させたいと思う。2017/4/14

940. 英語·音楽·R

昨日、「創造性と組織のイノベーション」の最終試験を終えて自宅に帰ってくると、すぐさまコーヒーを入れて、少しばかりくつろいでいた。オーストリア旅行から帰ってきて、書斎のソファの一角に座れるスペースを設けて正解だったと思う。その場所に座りながら、私は横山大観の画集に目を通していた。大観という日本画の巨匠も、この世界に自己の内面を表現することを宿命づけられた人間だったのだということをひしひしと感じていた。

画集を眺めながら、技術的な画法の進化のみならず、大観という一人の芸術家の内面的な成熟過程を見て取ることができた。それは微細な形で静かに進行していくものであり、それが如実に作品に現れているかというとそうではない。描かれている対象だけを肉体の眼を通して眺めていては、そ

れらの変化は見逃されてしまうのだ。しかし、その作品が生み出す意味を自分なりに汲み出そうと するとき、その作品が取り扱っている意味の深さが顔を覗かせるのだ。

私はソファに腰掛けながら、しばらく大観の作品から意味を汲み取ることを静かに行っていた。そのような休憩を少しばかりとった後、私は再び机に向かった。

幸運にも、「複雑性とタレントディベロップメント」のコースで執筆した協働論文に対して、担当教授から非常に高い評価を得ることができた。これまで履修したコースの中では最も高い評価であった。しかし、担当教授からさらに提案があり、このままその論文を最終成績とみなすことも可能だが、さらに修正・加筆を加えることも可能だという連絡を受けた。この共同論文は、インドネシア人のタタと共に執筆しているものであり、タタと私は教授からの申し出を有り難く受け取り、少しばかり修正を施すことにした。

担当教授からのフィードバックをもとに、これから修正をしていきたいと思う。教授から指摘を受けた 箇所はそれほど多くなく、修正の作業にそれほど多くの時間を費やすことはないだろうと予想される。 また、私よりも一足早く今学期の試験を全て終えていたタタがすでにいくつか修正をしてくれたので、 あとは私の方で少しばかり修正・加筆を加えればよいことになった。最終学期が始まる前に、何とか こちらの論文を完成させ、最終原稿を教授に提出したいと思う。

昨日は、夕方から就寝直前まで、自分の研究に没入していた。できるだけ就寝前の一時間は仕事から離れたいと思っているのだが、昨日はそれができなかった。というのも、研究データを分析するためにRというプログラミング言語を活用しており、プログラミングコードを書くことに熱中していたためである。つまり昨夜は、論文を読んだり書いたりすることに没頭していたのではなく、プログラミングコードを書くことに没頭していたのである。

幸いにも、R上で行いたい作業を実行するためのコードの大部分を書き上げることができた。あと数 箇所コードを書き足せば、今回の研究で必要となるデータ処理を全て完了させることができるだろう。 音楽という普遍語が持つ質感とは異なるものを、プログラミング言語が持っていることは興味深い。 昨日、私を没頭の渦に巻き込んだのは、まさにプログラミング言語が持つ不思議な質感だったのだ と思う。 今日の午前中のうちに、残り数箇所のコードを書き上げたい。本日の残りの時間は、英語、音楽、R という三つの言語が多くを占めることになるだろう。2017/4/14

【追記】

昨日偶然にも横山大観の画集を手に取ったのと同様に、一年ほど前のこの日も大観の画集を手に取っていたことを知る。実は今日もまた大観の画集を眺めたいと思っていた。絶え間ない創造に従事し続けた人たちの創造物と彼らの思想に触れること。それは今の私にとって最も大切な支えになっている。

今日は午後から大観の画集を眺め、この夏はヴィンセント・ヴァン・ゴッホの全ての作品と全ての手紙が収められた全六巻の資料に目を通していきたいと思う。今は亡き彼らから、私はいったいどれほど創造エネルギーを与えてもらっているだろうか。その恩恵に感謝の念を捧げながら、彼らと同様の精進を日々続けていきたいと思う。フローニンゲン:2018/5/5(土)13:12